

# すこやか

## 情報便 第4号

OACS  
Organization for Advancement of Children's Wellness through School Lunch



財団法人

学校給食研究改善協会

平成 20 年 1 月 10 日 発行  
〒 160-0004 東京都新宿区四谷 3-13 三栄ビル 4F  
TEL 03-3357-6755 FAX 03-3357-6756

<http://www.gakkyu.or.jp/>

上記 URL で本紙のバックナンバーもご覧になれます。

「すこやか」は学校関係者の皆様に旬の話題を提供する情報紙です。

- もくじ 座談会「発信！栄養教諭の取り組みを社会へ」…………… 1～2
- 全国の「食」に関するスケジュール（1～2月）…………… 2
- 日本栄養改善学会発表内容の概要 …………… 3～8

### 第54回 日本栄養改善学会学術総会

2007 9/19(土)～9/21(日) 長崎市

1F

お土産コーナー 休憩所

総会バス乗場(19日のみ)

3F B・C・D会場

学会本部  
座長・演者受付  
書籍展示会場・ドリンクサービス

2F A・E会場

座長・演者受付  
ポスター受付  
ポスター会場

総合受付・  
お土産コーナー



## 発信！栄養教諭の取り組みを社会へ ～日本栄養改善学会で研究発表～

(独)日本スポーツ振興センターが実施した「平成17年度児童生徒の食生活等実態調査」結果をクロス集計したところ「生活習慣と朝食欠食との関連」、「母子の朝食欠食状況が子どもの食に関する意識や健康状態に及ぼす影響」「孤食の実態とその影響」「母親の就業の有無による食に対する意識との関連」「運動頻度と食生活の関係」など、重要且つ興味深い結果が次々に現れました。それらを栄養教諭等の研究チームが第54回日本栄養改善学会(9月19～21日)で発表し、注目を集めました。各地域においても、埋もれている貴重なデータを社会に積極的に発信する取組が期待されます。

研究発表者  
座談会

### 学校給食の現場から社会に発信、理解を深める

- |                            |      |         |
|----------------------------|------|---------|
| 神奈川県立保健福祉大学                | 准教授  | 鈴木志保子 様 |
| 秋草学園短期大学                   | 講師   | 平山素子 様  |
| 松山市立浮穴小学校                  | 栄養教諭 | 菅綾 様    |
| 諫早市教育委員会                   | 主任   | 高瀬美智子 様 |
| 和歌山市立有功小学校                 | 栄養教諭 | 高橋啓子 様  |
| 鹿児島県立鹿児島盲学校                | 栄養教諭 | 飛松佳子 様  |
| 兵庫県教育委員会                   | 主任   | 瀬安希子 様  |
| 豊後大野市立朝地小学校                | 栄養教諭 | 牧野裕子 様  |
| 司会：(財)学校給食研究改善協会 事務局長 倉田勝弘 |      |         |

平成17年度  
児童生徒の  
食生活等  
実態調査報告書

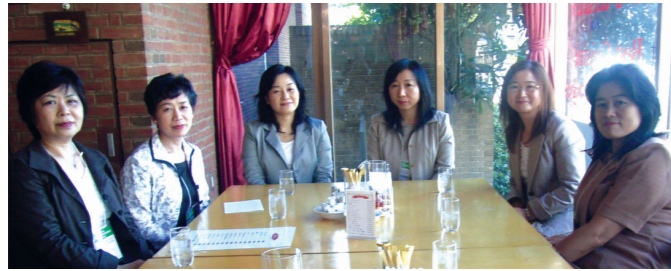


倉田：このたびの日本栄養改善学会で、5名の先生が栄養教諭として初めて発表されました。いろいろご苦労があったと思いますが、早速ご指導された平山先生、鈴木先生からお話を伺います。

平山：ベースに(独)日本スポーツ振興センターが平成17年度に実施された12,000件を超える膨大なアンケート調査結果のデータがあり、鈴木先生、牧野先生、私

もこの時の調査委員会のメンバーでした。

鈴木：この取組は、(独)日本スポーツ振興センターにワーキンググループを設置していただき研究を進めてきました。この貴重なデータも、これまで関係者を対象とした書物・刊行物等では発表されていますが、広く社会に発信されることがなく、いわば宝の山が眠ったままに近い状態であり、一部の人にしか評価されていませんでした。これを社会に発信して何とか有効活用したかったのが、一つ。二つめは、栄養教諭・学校栄養職員は、各地域において素晴らしい調査を沢山実施しているにもかかわらず、冊子にまとめたまま学会等に発表することが少なかったために、偏見かもしれませんが、栄養士の世界では学術的に評価が低いという実態がありました。そこで学会等で積極的に発表し、一般社会にも評価されるような広い視点で仕事をし、正当な評価を得て欲しいということ。三つめは、



栄養教諭を退職した後、大学等で後進の育成に携わる立場になった際に、こうした実績を積んで、大学内で正当な評価を得られるようにしたい。ということで、手始めに社会への発信をきっちり組み立てられる人材を各県に養成し、栄養教諭・学校栄養職員への指導を担っていたため、取組を文部科学省の田中調査官の御指導もいただき、進めてきました。

倉田：よく分かりました。ではその辺をふまえて、高橋先生、瀬先生、菅先生いかがですか。

高橋：初めての事で、間際までたいへんでしたが、ご指導を頂きながら、最後までやり遂げられて、非常に良い経験になりました。本当にやる気があれば、何でもできるんだという事は是非、県全体に広めたいです。

瀬：最初は何をするのか分からずに飛び込んだ感じでしたが、取り組むほどにテーマがどんどん変わっていき、発展していきました。本当に多くのことを学習しました。

菅：私は最後までテーマが決まらなくて、ご迷惑をかけたのですが、アドバイスを頂きながら調査の分析を進めるうちに、社会的にもたいへん興味深い結果が出てきました。

鈴木：実は菅さんのテーマは「母親の就業の有無による食に対する意識と児童生徒の生活習慣について」でした。これが唯一「有意差が出て欲しくない」データでした。その他は、孤食や朝食欠食がダメだとか、ネガティブを強調するために有意差が欲しかったのですが、働いているお母さんが不利になるような偏重をさけたいという気持ちがありましたので、いい結果が出て良かったと思っています。

倉田：本日欠席の神戸先生については、鈴木先生からお願いできますか。

鈴木：神戸さんは「栄養教諭のことをとにかく一生懸命語って、その重要な役割と必要性の理解を得たい。」と、独力で淡々と、また着々と進めておられました。

倉田：発表の内容からも伝わってきますね。では飛松先生お願いします。

飛松：田中調査官から連絡を頂いた時、まったく経験が

ないから無理ですと申し上げましたが、クロス集計の読み方も分からないし、悪戦苦闘しました。でも先生方のご指導に支えられてやり遂げられました。他の学校栄養職員の方も、是非この会に一度出て、広く病院、大学の栄養士さんや、大学の先生方がどのような研究をどのようにされているのか見聞して頂きたい、これからは、栄養教諭・学校栄養職員も大きな視野で勉強していく必要性を痛感しています。私自身、来年の栄養改善学会にも積極的に参加していきたいと思っています。

鈴木：来年は改善学会のあと、引き続いて国際栄養士会議も開かれる予定です。

牧野：私は当初のアンケート調査から参加し、今回のテーマ研究に関しては側面から拝見しましたが、皆さんのどんどん成長される様子に「学校栄養職員、栄養教諭、やればできる！」と本当に嬉しい限りでした。

平山：今までは、アンケートや食に関する指導が実施されるだけで検証が少なかったのですが、仮説→検証の繰り返しはとても大切です。そういう取り組みを積み上げて、栄養教諭・学校栄養職員のレベルアップが図られると思っています。

高瀬：私も、これまでどうしても単一に集計してそれぞれの結果を発信するということができていなかったので、これらを複雑にいろんな要因と絡めながら考察していくと非常に興味深いドラマチックな実態や要素を把握できるという高度な実体験学習ができました。

鈴木：データを読み取る際の客観性は非常に重要です。私情が入ってもいけないし、逆に数字に踊らされてもいけない。私の大学では、管理栄養士を3年以上経験された方の再教育機関を持っており、今回取り組んだような論文のまとめ方→発表を再学習するのですが、皆さんは、その方たちに勝るとも劣らない感性をお持ちです。ただ、実際、現場で子どもと接触した事例をいっぱい持っているからこそ、数字を見誤ってしまうという面もあると思います。しかし取り組みの進行に従って、その辺も習得され、わずか半年で皆さんがここまで到達されたのはすばらしい、の一言です。今回の学会発表で私たちは、まとめの後に必ずもう一つ結論を引き出して、「だから何だ」ということに言及していない他の発表が散見された中で、私達の発表内容をとても誇らしく思っています。

倉田：この度の皆さんの学会発表の試みが、全国の栄養教諭・学校栄養職員に波及し、意欲とレベルアップにつながっていく事を願っております。本日は、ありがとうございました。



### 【分析結果からわかったこと】

- ① 児童の「朝食をほとんど食べない」理由は、「食欲がない」が最も多い(図1)
- ② 「朝食をほとんど食べない」児童の就寝時刻は、「朝食を毎日食べる」児童に比べて遅い傾向がある。(図2)
- ③ 朝食欠食理由が「食欲がない」という児童は、睡眠時間が「朝食を毎日食べる」児童に比べて短い傾向にある。(図3)
- ④ その他以下のような結果が得られた。
  - ・朝食欠食理由が「食欲がない」児童の中で「夜食を食べる」児童は、「夜食を食べない」児童よりも、夕食を早く食べ始める傾向がある。
  - ・朝食の欠食理由が「食欲がない」児童の中で、「夜食を食べる」児童の夜食の内容は、その半数は炭水化物が中心である。

### 【背景及び目的】

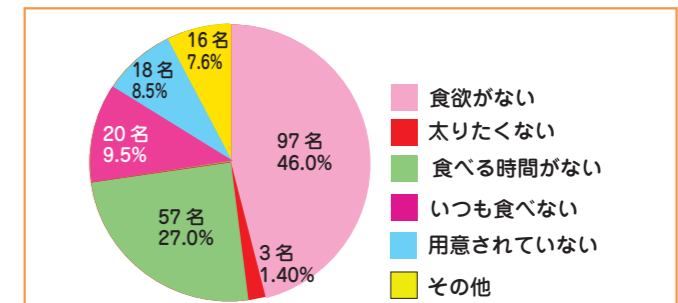
食育基本法が制定され、それを受けて食育推進基本計画が平成18年3月に策定された。そこにある、児童における朝食欠食を0%にするという数値目標を達成するために、栄養教諭としてどのような取り組みを実施していかなければならないのかを本調査の結果から導き出すために、研究を行った。

### 【結果及び考察】

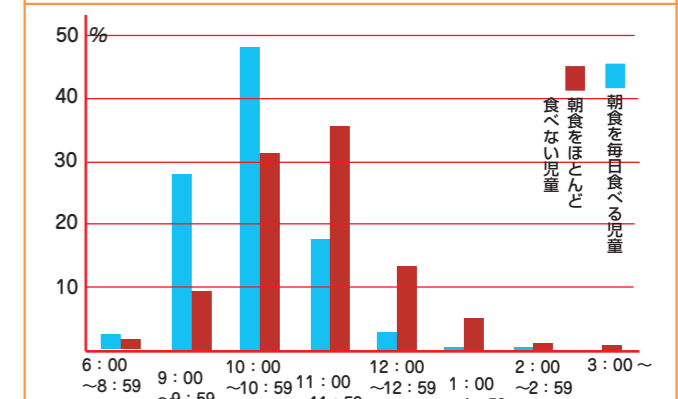
まず、朝食欠食の理由として、「食欲がない」という回答が、平成12年度の調査と比較しても増加しているという点に注目して、なぜ朝、食欲がないか、その原因を研究した。この結果から、朝食を食べないという状況を改善するためには、生活習慣全体(就寝時刻、睡眠時間、夕食の時刻、夜食の摂取と夜食の内容等)を見直す必要があることが示唆された。

このことから、以下のことが考えられる。

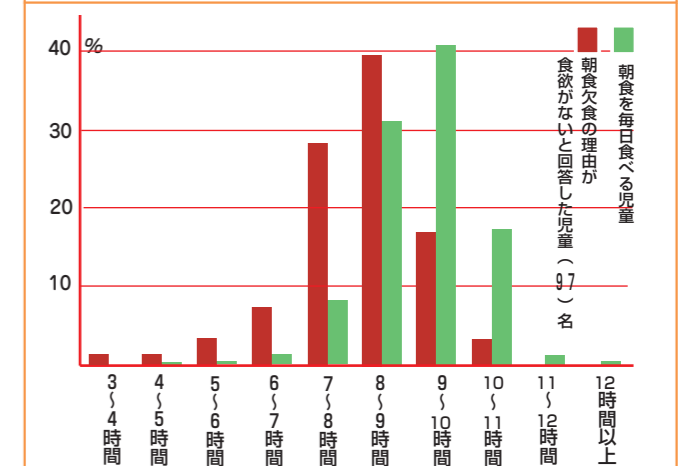
1. 朝食欠食の原因には様々な要因があり、朝食欠食を改善するためには、集団指導のみでは難しいことから、個別的な指導を行う必要がある。
  2. 改善のための方策を下記の段階で実施することが望ましいと考えられる。
    - ① 児童には集団指導、保護者に対しては様々な啓発を計画的に行い、朝食欠食の現状やその原因についての情報の共有化を図る。
    - ② 改善が見られない児童に関しては、児童と保護者に対して個別指導を実施する必要がある。特に保護者の意識改革を図ることが重要である。
    - ③ なお、改善が見られない児童に関しては、栄養教諭は、朝食欠食の原因を把握した上で、短時間で出来る朝食献立や望ましい夜食の内容を提示するなど、家庭訪問等を通して、具体的な個別指導を実施する。
- 今後、様々な要因で改善の意思をもたない保護者に対する働きかけや児童に対する対応をどのようにしたらよいかが今後の課題である。



(図1) 朝食をほとんど食べない児童の朝食欠食の理由



(図2) 朝食を「ほとんど食べない」児童と「毎日食べる」児童の就寝時刻の比較



(図3) 朝食欠食理由が「食欲がない」児童と朝食を「毎日食べる」児童の睡眠時間の比較

## 全国の〈食〉に関するスケジュール (1月~2月)

月日	催事名	会場名	主催(問い合わせ)	TEL
1/11(金)	食育交流シンポジウム・岩手県	ホテルメトロポリタン盛岡	文部科学省	03-6734-2095
1/29(火)	第51回岡山県学校給食研究協議大会	岡山県総合教育センター	(財)岡山県学校給食会	086-263-6465
1/31(木)	平成19年度食育推進フォーラム 大分県学校給食振興大会 基調講演: 学校における食育の推進 ~学校教育活動全体で家庭と連携して~ 香川 明夫氏(女子栄養大学短大)	大分市コンパルホール	(財)大分県学校給食会	097-543-5121
2/21(木) ~ 22(金)	全国学校健康教育栄養士協議会研修会 (21日に)講演「栄養教諭の行う指導の具体化」(社)全国学校栄養士協議会 田中 信 名誉会長 講演「今、栄養教諭に求められているもの」文部科学省 田中 延子 学校給食調査官	東京ガス本社ビル大会議室	(社)日本栄養士会	03-3295-5151

## 2 保護者の朝食欠食が、子どもの食に関する意識に影響を及ぼしている!!

兵庫県教育委員会 主任 瀬 安希子



### 【背景及び目的】

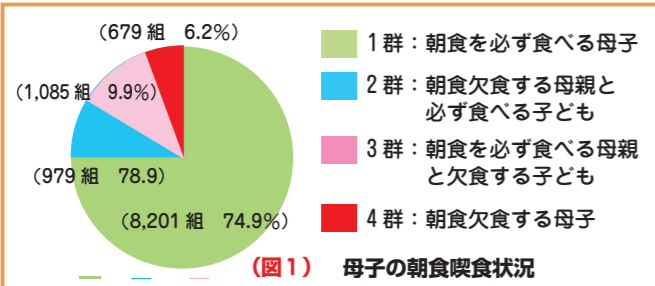
生涯に渡って心身共に健康に過ごすための取組として「早寝、早起き、朝ごはん」が推奨されている。子どもが望ましい生活習慣を確立するには、日頃より規則正しい生活を送ることが必要であるが、子どもたちの生活習慣は保護者の

それに大きく左右されると考えられてきた。そこで

- ①児童生徒及びその保護者の朝食欠食の実態を明らかにすること
- ②保護者の朝食欠食が、子どもにどのような影響を及ぼしているかについて検証すること
- ③家庭での食育や学校の支援について検討することを目的とし、調査結果を分析した。

### 【方法】

本調査における保護者は94.0%が母親であったため、母親とその児童生徒のみ抽出し分析を行った（有効回収数10,944組）。また、朝食欠食の定義を週2日以上欠食とし、次の4群に分類した。



### 【結果】

今回の調査結果から、図2のとおり朝食欠食している母親の子どもは朝食欠食する割合が高い。

また、3群よりも4群の子どもで「いつも食べない」「用意がない」ために食べない割合が多く、朝食欠食の習慣化の傾向があった。

図3「子どもは三食必ず食べることに気をつけているか」には、母親の朝食喫食状況により有意差があった。一方、生活習慣や健康状態は、子ども自身が朝食を食べるか否かにより影響を受けると考えられた。

### 【考察】

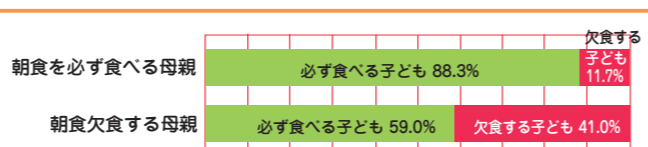
以上のことから、朝食喫食は単なる栄養摂取の問題のみならず、心身共に健康に生活するための基本であることを保護者や教職員が共通認識し取り組むことが必須であると考えられる。家庭においては、①子どもに必ず朝食を食べさせ、保護者自身も意識し実践すること ②保護者が子どもに規則正しい生活習慣を身につけさせること ③家族が食事を共にすることを、家

### 【分析結果からわかったこと】

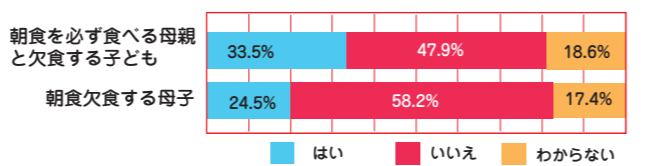
- ①朝食欠食している母親の子どもは、朝食欠食割合が高く(図2)、朝食欠食が習慣化する傾向がある。
- ②子どもの「三食必ず食べる」ことに関する意識は、子どもが欠食していても、母親が朝食を食べている方が意識が高い(図3)。
- ③朝食欠食の子どもは、体の不調を訴える割合が高い(図4)。
- ④その他以下のような結果が得られた。
  - ・朝食を食べる子どもは、生活習慣及び健康状態が良い。
  - ・母子のどちらかが欠食すると孤食の割合が高い。
  - ・自身が朝食欠食する、もしくは子どもに欠食をさせている母親は、学校給食に関する資料を読む割合が低い。

族全員が意識し実践することが望まれる。

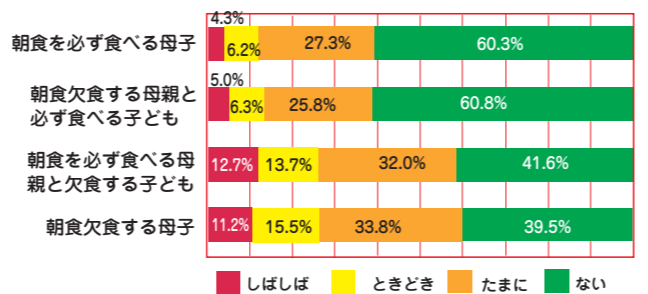
さらに、学校においては、①栄養教諭が中心となり、児童生徒に「早寝、早起き、朝ごはん」及び「家族そろっての食事」の重要性について指導する ②学校行事において食育講演等を実施し、保護者の朝食欠食への意識、行動が子どもの生活に支障を来していることについて理解を促進する ③教職員が相互に連携し、朝食欠食の傾向がある児童生徒を早期に発見する ④母子の朝食喫食状況によって、学校給食に関する資料の閲覧状況にも有意差があることから、関心が低い保護者にこそ内容が伝わる紙面の工夫をする、等の対応が必要ではないかと考える。



(図2) 母親の朝食喫食状況と子どもの朝食喫食状況



(図3) 子どもは「三食食べることに」気をつけているか



(図4) 朝なかなか起きられず午前中調子が悪い

## 3 孤食傾向の子は、食生活及び食に関する意識が低く、不定愁訴を呈する割合が高い!

太田市教育委員会 学校管理課課長補佐 神戸 美恵子



### 【背景】

近年、食生活の乱れが深刻な問題としてあげられ、望ましい食習慣の形成は今や国民的課題となっている。特に、1981年にテレビ局が中心となって全国調査を行なって以降、子どもの孤食が社会的問題として取り上げられてきた。

家族一緒に食事は、家庭生活の第一歩であるとともに、大切な家庭のコミュニケーションの場でもある。中教審は『新しい時代を拓く心を育てるために』～次世代を育てる心を失う危機～(平成10年答申)において、「食」は子どもの身体的発達のみならず精神や社会性の発達に深くかかわっているものであることから、家族と一緒に食事をとる機会を確保すべきことを提言した。また、「食育推進基本計画」においても改善しなければならない課題として孤食が取り上げられている。

### 【目的】

『平成17年度児童生徒の食生活等実態調査』の結果では、平成12年度と同調査結果と大きな差は見られなかったが、家族団らんの食事は徐々に減少していることがわかった。このことから、児童生徒の孤食に注目し、その実態、影響等を保護者の意識を含め明らかにし、検討することを目的とした。

### 【方法】

「朝夕食共に家族そろって食べる」児童生徒の群と「朝夕食共に1人で食べている」児童生徒の群を抽出し、朝食を食べる頻度や食事時間等の生活習慣、不定愁訴を呈する割合等を比較した。また、その児童生徒の保護者それぞれの群の比較を行った。

### 【孤食対策と栄養教諭の役割】

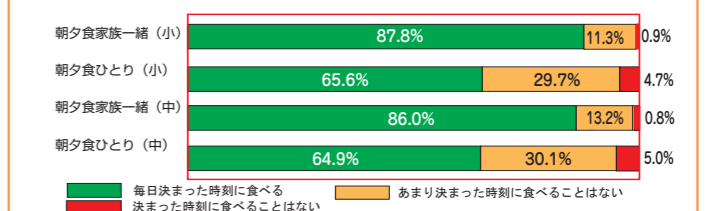
孤食は主に家庭の問題であるが、栄養教諭は、孤食の弊害について学校内における指導にとどまらず、保護者や関係機関等に対し、正しい情報の提供を行うとともに、社会全体に啓発していく必要がある。

さらに、このような現状を改善するために、学校、地域社会、行政等が協力して積極的な取組を推進していくことが重要であり、栄養教諭は子どもの実態を把握している食に関する教育の専門家として、コーディネーターの役割を果たしてかなければならない。

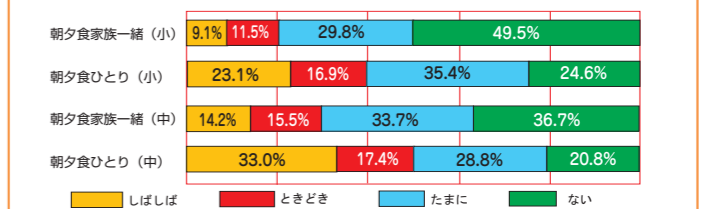
また、行政等で「家族でいただきますの日(毎月19日 群馬県)」を創設する等の取組を通して、家族で食事をする環境作りを行うとともに、孤食が改善されない家庭には、個別に働きかけを行っていくことも重要である。

### 【分析結果からわかったこと】

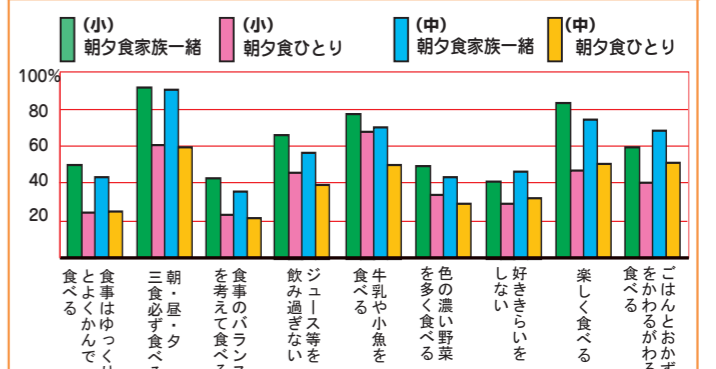
1. 「1人で食べている」児童生徒は、「家族そろって食べる」児童生徒に比べ以下のような傾向が見られた。
  - ①決まった時間に食事をしていない割合が高く(図1)、食事時間は短い。
  - ②不定愁訴を呈する割合が高く、「何もやる気が起こらない」(図2)、「イライラする」等精神面での割合が高い。
  - ③食生活及び食に関する意識が低い(図3)。
  - ④その他以下のような結果が得られた。
    - ・就寝、起床時間とも遅く、すっきり目覚めていない。
    - ・朝食欠食率が高い。
    - ・学校給食を嫌いな割合が高い。
    - ・食事の基本的なマナーが身につけている割合が低い。
2. 児童生徒に「1人で食べさせている」保護者は、「家族そろって食べさせている」保護者に比べ、次のような傾向が見られた。
  - ①保護者自身が朝食を欠食し、朝食欠食を習慣化している割合が高い。
  - ②献立表等学校給食に関する資料に目を通す割合が低い。
  - ③子どもの生活習慣での課題を多く抱えている傾向が多くみられる。



(図1) 毎日決まった時間に食べるか



(図2) 何もやる気が起きないことがあるか



(図3) 食事の時気をつけていること

# 4 運動をしている子は、朝食を食べ、おやつは食べない。そして、朝はすっきりと目覚めるようだ。

鹿児島県立鹿児島盲学校 栄養教諭 飛松 佳子



## 【分析結果からわかったこと】

- 運動頻度の高い児童は、していないまたは頻度の低い児童に比べて次のような結果が得られた。
  - ①おやつを食べる割合が低い(図2)、朝食の欠食が少ない、学校給食が好んで残す割合が低いなど、食事を規則正しくとっている。
  - ②朝すっきり目覚める割合が高く(図3)、イライラする(図4)、やる気が起きない、動悸や息切れなどの不定愁訴が少ない割合が高いなど、体調が良いと言える。
  - ③食事の手洗いやあいさつをする割合が高く、食事のマナーが身に付いている。
- 「食欲がない」ことについては、運動頻度との有意差は認められず、食欲に関しては運動頻度の影響は受けないと言える。

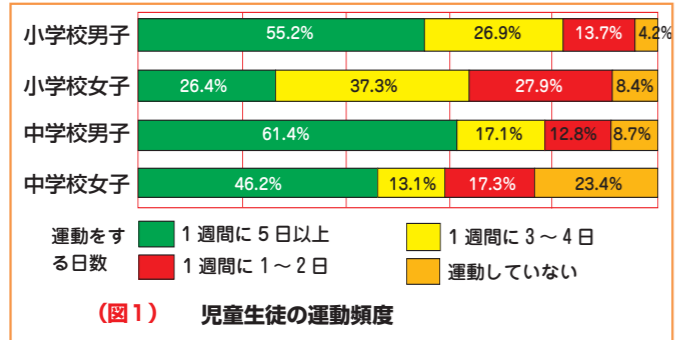
**【背景】**近年、生活様式の変化や少子化の問題、運動の機会の減少や生活習慣の乱れなどから児童生徒の体力が低下傾向にあると言われている。特に運動不足は、肥満につながり、肥満に伴う糖尿病や高血圧、高脂血症などの生活習慣病の若年化が危惧されている。

**【目的】**児童生徒の運動習慣の実態を明らかにし、運動の頻度が食生活や不定愁訴に及ぼす影響について検討することを目的とした。

**【方法】**運動頻度については、1週間に何日運動をするかにより4グループに分け、検討を行った。

統計処理は、 $\chi^2$ 検定(8ページ参照)を用いた。

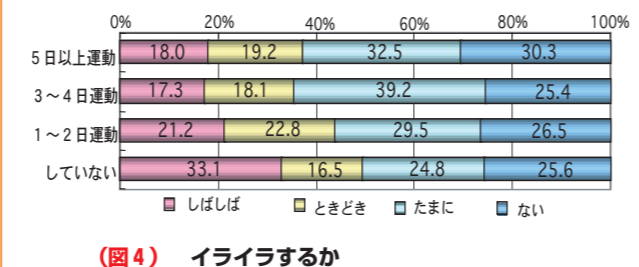
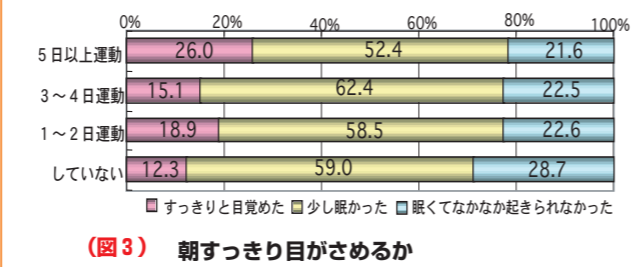
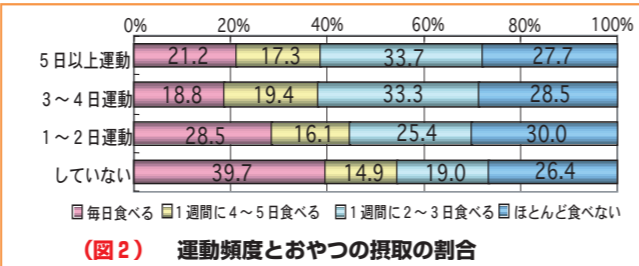
**【結果及び考察】**運動頻度については下記のグラフのとおりであった。今回は小学校男子に注目して検討を行った。



小学校男子(5年生)の運動頻度をまとめた結果、運動をしている児童はしていない児童より望ましい食生活を送っており、不定愁訴を訴えることが少ないなど、運動頻度の及ぼす影響が明らかになった。また、運動頻度が高いほどよい傾向が見られた。

このことから、運動をすることは、エネルギーを消費するだけでなく、望ましい食生活の実践や体調の安定につながっていると考えられる。

食育と運動を関連させて進めることは、より一層の指導効果があると考えられるため、学校においては、学級担任、保健体育担当者、養護教諭、栄養教諭等が連携し共通理解のもと取り組むことが大切である。



## <運動の推進について>

学校においては、現在推進されている体力向上の事業の充実を図り、運動をしていない児童生徒に運動を習慣づける必要がある。

また、家庭で運動の大切さを再認識し、土曜・日曜などにも運動する習慣を身につけさせることが大切である。家族で運動することにより、保護者が運動習慣を身につけられたり、団らんの機会ともなる。

さらに、地域で進められているコミュニティ・スポーツクラブなどを活用して、地域の人や異年齢の人と交流を深めることも運動を習慣化する手立てとなる。

# 5 母親の就業有無と「孤食」「子どもの生活習慣」などとの関係は?

愛媛県松山市立浮穴小学校 栄養教諭 菅 綾



## 【分析結果からわかったこと】

- ①母親の就業の有無については、朝食摂取状況において影響が認められたが(図1)、子どもの孤食への影響は見られなかった(図2)。
- ②働く母親は、時間のゆとりが少ないが、母親自身の食に対する意識には、就業の有無による差はなかった。(図3)
- ③子どもの生活習慣は母親の就業の有無による大きな影響はなかった。(図4、5)

## 【背景及び目的】

社会環境の変化による、子どもたちの生活習慣や食習慣の様々な乱れが問題とされている。そのような中で働く母親の増加は、子どもを取巻く環境の変化の一つであると言われることが多い。そこで、母親の就業の有無が、母親自身の食に対する意識やその児童生徒の生活習慣等に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

**【方法】**中学生は、母親の就業の有無と生徒の食意識や生活習慣の間には有意差は認められなかったことから、小学生について着目し、母親とその児童のみを抽出した。(有効回答5560組)母親を「家事専業」26.0%、「働いている」74.0%の2群に分けて分析を行った。「働いている」の定義については、就業の時間、形態に関わらず、本人が有職者であると回答したものとする。

## 【結果と考察】

### = 朝食摂取、孤食への影響 =

朝食摂取については働く母親の子どもの方が欠食率が高く、夕食の共食については、働く母親の子どもの方が「家族そろって」「大人の誰かと」食べる率が高かった。

### = 母親自身の食に対する意識 =

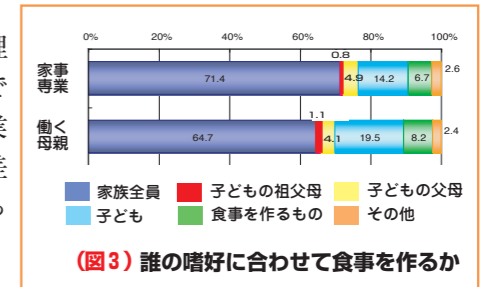
母親自身の朝食摂取状況では、働く母親は、家事専業の母親に比べ、朝食欠食率が高かった。

朝食欠食理由は、働く母親の「時間がない」(42.3%)に対し、家事専業の母親は「食欲がない」(41.9%)が最も多い理由であった。

また、家事専業の母親に比べ働く母親は、「夕食作りにかかる時間」「子どもが食事をする時間」は短い、

「子どもの偏食や家族団らんを心配すること」「食事をする子どもの嗜好に合わせて作る」項目において割合が高かった。

「子どもと料理を作る頻度」では、母親の就業の有無による差は見られなかった。



### = 母親の就業の有無と子どもの生活習慣 =

働く母親の子どもの方が1週間に運動をする頻度が高かった。おやつの頻度は、働く母親の子どもの方が、おやつを食べる日数は少なかった。

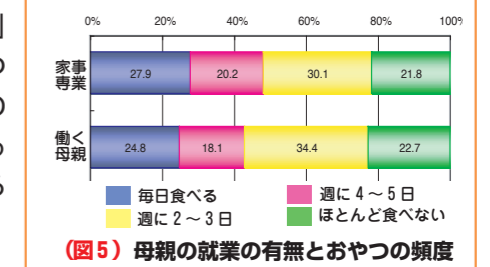
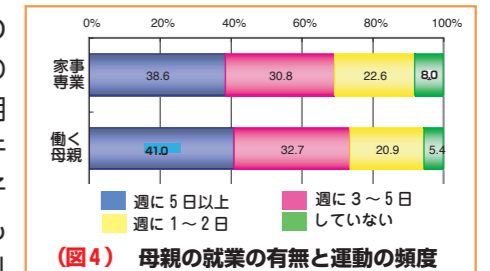
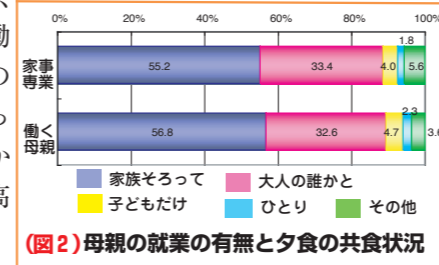
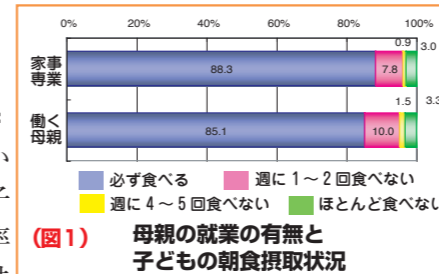
子どもの夜食の頻度、学校給食の好き嫌い、「朝起きられず、午前中身体の調子が悪い」「何もやる気がない」「イライラする」の不定愁訴については、母親の就業の有無による有意差は認められなかった。

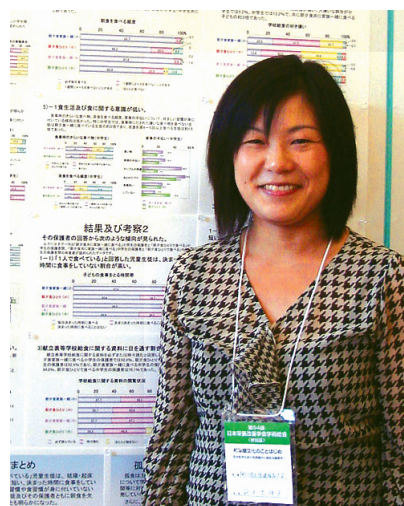
### = 総合的考察 =

「朝食欠食の理由」や「食事作りにかかる時間」等の結果から、働く母親は時間のゆとりが少ないことが推測されるが、母親自身の食に対する意識には、就業の有無による差はないものと考えられる。

「子どもと調理を作る頻度」では、母親の就業の有無による差がなく、共食状況においては、働く母親の子どもの方が孤食であると感じている割合が低い等の結果から、働く母親は、子どもと一緒に食の関わりをもつことを心がけていることが窺える。

また、母親の就業の有無による、子どもの食生活への影響に差は見られなかった。





- ①学会発表は1つのテーマについて掘り下げ、栄養教諭という専門職だからできる考察を行うことに大きな意味がある。
- ②データの分析は、単純集計だけでなく、クロス集計や、 $\chi^2$  検定（カイ二乗検定）という分析法を用いると、より詳しいことがわかる。

学会発表は、皆さんの学校や地域で得られた事例やデータを多くの人たちに伝えることです。普段、感じていること、考えていることをエビデンスを示して発表することにより、社会に影響を与え、将来に向けての方針や改善に貢献することができます。

学会発表の内容は、得られた結果だけを「現状」として発表することもできますが、1つのテーマについて掘り下げ、栄養教諭という専門職だからできる考察を行うことに大きな意味があります。思い込みや固定観念を一切持たずに、結果を受け止めて、その意味することを考察します。とても、時間がかかりますが、楽しい作業です。学校現場にあるさまざまなデータを将来のために生かすべく、分析をしてみたいでしょうか？

学会発表までの手順は、以下のように行います。

## 1. 発表テーマの決定

子どもを取り巻く現状、将来を考えるために必要なデータ、子供たちや保護者が抱えている問題、迷信のように言われているけれども、エビデンスのない事項などを考えます。次にその中で、出てきた課題をこのデータで示すことができるかの検討を行い、課題の抽出をします。この課題が、発表のテーマとなります。大きなテーマと小さなテーマがあります。大きなテーマは、小さなテーマがいくつも合わさってできるものです。小さなテーマをコツコツとこなし、何年かかけて、大きなテーマを完成させることをお勧めします。

## 2. 発表のストーリーを考える

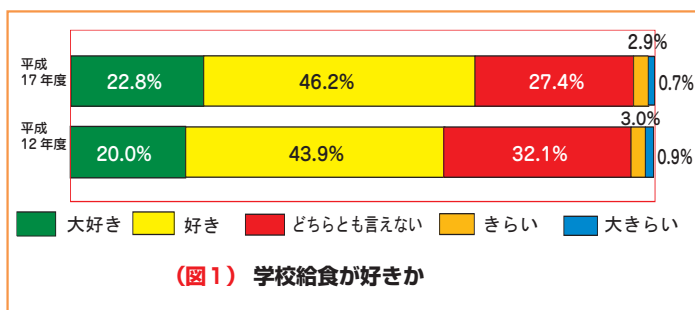
どのようなストーリーでその課題を明確にしていくかを考え、仮説ストーリーを立てます。ストーリーを構築するためにデータの整理と分析を行います。分析を進めていく中で結果が、仮定していたものと違った場合には、ストーリーを考え直します。

## 3. データの整理と分析を実施する

データを分析するにあたり分析法を考えなくてはなりません。今回の発表では、単純集計だけではなく、クロス集計と  $\chi^2$  検定を用いました。

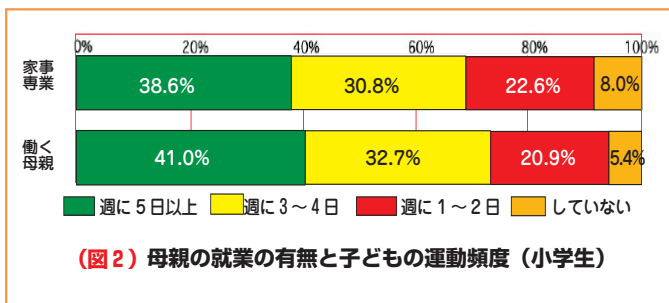
### ①単純集計とは

図1のように、調査項目ごとに回答者全体（母数・母集団）の中でそれぞれの選択肢を何人が選んだのかを集計したもので、主に全体の傾向を見ることができます。



### ②クロス集計とは

2つ以上の要因を組み合わせた集計がクロス集計です。クロス集計によって単純集計で分かった回答内容の違いがどのような要因と関連しているかをみることができます。例えば、菅さんの発表より、家事専門の母親と働いている母親の子ども（児童）の運動頻度との関連についてみました。図2からは、家事専門の母親の子どもと働いている母親の子どもで差がみられます。



### ③ $\chi^2$ 検定とは

$\chi^2$  検定は、クロス集計によって確認された差が、偶然なのか、誤差なのか、あるいは、偶然では考えられない関連があるのかを判断する方法です。「差がある」や「関連がある」と言いたい時には、その根拠となるエビデンスを示さなくてはなりません。その方法の1つが「 $\chi^2$  検定」です。図2では、2群間で有意差が認められたので、偶然の差ではなく、家事専門の母親と働いている母親の子どもの運動頻度には差があるということがわかりました。この結果は、よいか、悪いかを言っているのではなく、差に意味があることを示しています。この差が、どのような意味があるかを考察することが研究です。